

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	森岡 優紀
論文題目	叙述形式と東アジアの近代——中国清末期に対する考察		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本学位申請論文は、20世紀の初頭に提起された「史界革命」と「小説界革命」の主張を手がかりに、近代的伝記と近代文学の成立を梁啓超と魯迅の作品を通して検証し、歴史記述と文学における叙述形式の近代化の過程を考察したものである。</p> <p>本論文は、序章、第一部「近代的伝記の成立過程」(第一章～第三章)、第二部「近代写実小説の成立過程」(第四章～第八章)、および結語から構成されている。</p> <p>序章では、日清戦争から辛亥革命に至る時期について、中国の知識人が西洋の知識普及の必要性に直面した時期であるとの指摘がなされる。そしてこの時期を代表する知識人の一人である梁啓超が、国民意識の形成には「愛国心の源泉である」歴史学の改革が必須だと論じ、さらに「一国の民を新たにするには、まず一国の小説を新たにせねばならない」と主張したことを紹介した上で、中国においては歴史記述と文学の近代化は、国民の近代的意識の形成にとっての出発点であった、と位置づける。そして中国近代(清朝末年)に歴史の一形式としての「伝記」概念に大きな変化が起こったこと、民衆を啓蒙するための小説は、梁啓超の段階では近代的表現形式を確立していなかったため、読みづらいものか旧小説の踏襲にとどまっておき、その変革は次世代の魯迅によってなされたことを論じ、第一部では「歴史」を構成するものとしての西洋近代的「伝記」の成立過程を考察すること、第二部では、近代小説形式の成立を魯迅の翻訳・創作した小説についてたどることを課題とすると述べる。</p> <p>第一章は、黎汝謙らが翻訳した『華盛頓(ワシントン)全伝』(1886)に着目して、その重要性を指摘する。申請者は、清末(19世紀後半)に中国での宣教雑誌に掲載された短編伝記の一覧から、短編伝記が宗教や学問・時事を理解するための付随的な文献にとどまっていたのに対し、ワシントンの長編伝記は「アメリカ開国史略」としての意義を見出されて翻訳され、梁啓超編集の改革派の雑誌に掲載されたものであって、康有為と梁啓超の周囲の知識人だけにこうした西洋近代由来の「伝記」に注目し歴史の一種と見なす考え方が定着した、と強調するのである。そこから申請者は、梁啓超らが「伝記」について伝統中国とは異なる認識を獲得していた、とする。</p> <p>第二章は、中国近代における「伝記」が政治的なイデオロギーと密接な関連を持つに至ったことを、梁啓超が横浜で刊行していた雑誌『清議報』掲載の「殉難六烈士伝」から論証する。この「殉難六烈士伝」とは、康有為・梁啓超ら改革派に対する時の最高権力者西太后の強権発動の結果、康・梁派の六名が処刑されるに至った政変の経緯を述べるものであり、従来の研究でしばしば一次史料のように扱われてきたが、同伝の作成方法については等閑視されてきた。本章は、この「殉難六烈士伝」が日本人の書いた「清国殉難六士伝」と康有為の「我史」をもとに「烈士」のイメージを重んじる、自派に都合のよいものへと事実関係を改竄したものであることを指摘し、「伝」の形式でイデオロギー普及を試みた初めてのものであった、とする。</p> <p>第三章は、中国人(梁啓超)が最初に著した近代的伝記、『李鴻章』を考察の対象とする。従来の研究ではこの伝記の「凡例」に言及するだけであったが、本章はテキストの分析を通じて、同書が吉田宇之助『李鴻章』と早田玄洞『李鴻章』の構成を融合して成立したものであること、ただし、これら日本の伝記が李の人物像に焦点をあてるのに対し、梁啓超は歴史的事件に注意を払い、中国で刊行された『中東戦紀本末』の戦闘に関する記述を引用し、電報などの史料を多用しているところに特徴がある、と述べる。</p>			

第四章は、梁啓超の小説界革命の理念提起の少し前に発表された、日本の政治小説「佳人之奇遇」と「経国美談」の翻訳を考察する。申請者は、文言で記され登場人物が経歴・思想を語る前者と、章回小説の形式を踏襲した白話文である後者のいずれも、他に類似した多くの小説を生み出すことになる、と述べる。そして、これらの小説を踏まえ、小説に含まれる認識が現実認識に先行してこそ人々を啓蒙できるのだ、とする梁啓超の小説観が指摘されている。

第五章は、魯迅が翻訳した、ジュール・ヴェルヌの科学小説「月界小説」と「地底旅行」を扱い、こうした作品の翻訳には、梁啓超の影響が見出せるとともに、魯迅は小説のもつ形象的な力に着目しており、小説が啓蒙に役立つのは具象性・形象性と深く関係があることに意識的であった、とする。また、梁啓超の目指したことを魯迅が果たしたと見なしうる、とも論じられている。

第六章は、ギリシャのテルモピュライ戦役の史実を下敷きにした魯迅の作品「スパルタの魂」について考察している。翻訳か創作であるか不明であったこの作品について、本章は、魯迅が明治期の少年雑誌や婦人雑誌のギリシャ関連記事を参照しながら、創作を加えた、語り手が自らの思想を語るタイプの知識人向け小説であることを指摘した。

第七章は、魯迅と周作人が共訳（ロシア語の原作をドイツ語訳から重訳）した「域外小説集」を扱う。この小説集では、「焦点法」を用いることで小説世界にリアリティがある作品が選択されており、単純な効用的文学観から生み出された「スパルタの魂」に対し、「小説」を正統な文学と見なす意識が芽生えている、と申請者は位置づける。

第八章は、「狂人日記」の数年前の魯迅の文言小説「懐旧」を考察対象とする。文言で書かれているため近代小説とは見なされてこなかったこの小説は、「域外小説集」で使用された「焦点法」が作品全体に貫かれているという点では中国で初の小説であり、この意味で近代小説としての特徴を備えている、と申請者は論じる。さらに、作家の有する近代的意識と小説の「写実」を結びつける方法がはじめて提示された小説であると結論づけられる。

「結語」では、各章の内容を簡明にまとめた上で、伝記と小説の形式が梁啓超と魯迅によって、古い形式から新しい形式へと転換したことがテキストの分析によって明らかになった、と述べる。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、「叙述形式」に注目して中国における近代的伝記と近代小説の成立過程を明らかにしたものである。

第一部で、学位申請者は「伝記文学」という従来の研究枠組みの不十分さを指摘し、「伝記」をあらためて歴史叙述の中に置き直し、旧来の「伝記類」が近代的伝記に転換した、最初の重要な事例として黎汝謙等『華盛頓(ワシントン)全伝』をあげる。そして、伝記の原本がThe Student's Life of Wahington, 1870であることを発見し、この長編でかつ明確な章立てが行われた『華盛頓全伝』こそが、中国語で刊行された最初の「近代的伝記」であるとの見解を打ち出す。第二に、申請者は「近代的伝記」のもう一つの要素であるイデオロギーが盛り込まれた伝記として、戊戌政変で処刑された6名の伝記「殉難六烈士伝」(1899)を考察対象とし、これまでの研究が注目してこなかったその作成方法を検討、同書は日本人が書いた「清国殉難六子伝」と康有為の「我史」を梁啓超が編集し、烈士のイメージを打ち出し、一部の事実関係を改竄して成立したものであることを明らかにした。従来、「殉難六烈士伝」は一次史料扱いされたこともあるのだから、この点は歴史学に対する貢献と評価できる。さらに第三に、申請者は、中国人が書いた初めての「近代的伝記」として梁啓超『李鴻章』(1901)を取り上げ、そこに、日本の吉田宇之助『李鴻章』や早田玄洞『李鴻章』、そして徳富蘇峰の「英雄論」の影響を指摘しているのだが、こうした指摘も、「伝記」がさかんに書かれた清末期著述研究の内容を豊富にするものだと評価できる。

第二部では、中国近代小説の成立の過程を、従来の研究には見られない視座からたどっている。すなわち、従来の定説では、胡適が「文学改良芻議」を書き、これを受けて陳独秀が「文学革命論」を発表し、彼らの問題提起を受けた魯迅が、雑誌『新青年』に発表した文学史上初めての口語小説「狂人日記」によって近代小説が誕生したとされてきた。これに対し、第二部収録の各章(第四章～第八章)が、梁啓超が啓蒙のための文学の創造＝「小説界革命」を提起したことを手がかりに注目するのは、第一に「小説界革命」の提起のあと約20年間、なぜ近代小説が現れなかったのか、第二になぜ梁啓超は近代小説を書けなかったのか、第三に、なぜ魯迅だけが、近代小説の創出に成功したのか、といった問いかけである。中国近代文学研究の立場から見れば、この問いかけは重要な問題提起だと言える。

そこで、申請者が注目するのが翻訳小説、すなわち政治小説である「佳人之奇遇」(1898-99)や「経国美談」(1899)、魯迅が翻訳した科学小説「月界小説」(1903)、「地底旅行」(1903)などである。これらの多くは旧来の章回小説の形式を取っており、「語り手」が登場する。啓蒙を意識して魯迅が創作した「スパルタの魂」でも、「史伝」の語り手が小説の意味やテーマを述べる。これに対して、「域外小説集」(1909)は、人物に焦点をあてる方法が一貫し、「一人称制限叙事」ないし「三人称制限叙事」という「焦点法」が用いられている。これは、魯迅が海外(ロシア)の文学作品から学んだ、近代小説の形式であった。そして申請者は、魯迅はこの翻訳を通じて近代小説の形式が小説の「真実性」と深く関連していることを認識したのだ、とする。さらに、この翻訳小説は、内容が斬新であるが形式は古いとされてきたのだが、その古風な文言も「小説」を中国の正統な文学と位置づけたからこそこのことであり、魯迅はここで近代小説の形式と小説世界のリアリティを自覚したのである、との論点が導かれる。

そして、こうした自覚は、近代小説形式の萌芽である小説「懐旧」(1912)に

つながる、と見るのが申請者の主張である。この小説は視点が少年「僕」に限定され、その語りの中で伝統社会の構造を批判的に描かれている。そして、この二つが叙述において融合され、そこで小説の啓蒙的役割が「写実性」に転化しているのである。

したがって、前記第一と第二の問いに対する解答は、新しい小説を書こうとする作家あるいは翻訳者たちに近代小説の「形式」への自覚がなかったからだ、ということになる。だからこそ、「小説界革命」の提起から約20年間、近代小説が現れなかったのであり、梁啓超も近代小説を書けなかったのである。そして、第三の問いに対する解答は、魯迅だけが近代小説に対する自覚を持っていたからだ、ということになる。こうした「形式」への重視は、本論文の主要な主張であり、「内容」のみを問題としてきた従来の研究に対する見直しを求めるものとなっている。このことは、中国近代文学研究への大きな貢献であると位置づけられる。

もちろん、本論文には、指摘されるべき課題も存在する。第一部で取り上げられる『華盛頓全伝』は、当時の雑誌『時務報』に掲載された一部しか、検討の対象になっていない。また、第二部における「形式」と写実性の関連の指摘は、より多くの個別具体的な事例によって、一層深められるべきであろう。しかしながら、これらの課題は、申請者の今後の研究の進展によって解決し得る性質のものである。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成28年6月17日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降